

感染回避率からみた外頸静脈を用いた中心静脈カテーテル留置法の有用性の検討

弥刀中央病院 吉田昌弘、金銅伸彦

【はじめに】嚥下機能低下や摂食障害を持つ高齢者に対する高カロリー輸液療法は有用な方法ではあるが、しばしばカテーテル感染が問題となる。当院では従来から上肢PICC留置を行っていたが感染回避の面では良好とは言えず、2018年より外頸静脈を用いた方法を導入した。

【方法】対象は2018年よりPICCカテーテルキットを用いて外頸静脈より高カロリー輸液療法を行なった連続62例(平均年齢83±10歳)。熱発時血液培養陽性または抜去時カテ先培養陽性をカテーテル感染と定義し、Kaplan-Meier法を用いた感染回避率をCVポート症例25例および上肢PICC症例20例と比較検討した。

【結果】全例留置時のトラブルは無く、30、60、100、200日での感染回避率は98、94、89、48%で、CVポートの100、96、84、71%には劣るものの上肢PICCの100、49、15、0%より有意に良好であった(p<0.01)。

【考察】外頸静脈は直視下穿刺によるカテーテル留置が可能で、合併症のリスクが低く、今回の結果から上肢PICCより感染回避に優れ、約3ヵ月間の経口摂取訓練の計画立案に有用と思われたが、それ以上の時間を要する症例または経口摂取改善が期待できない症例にはCVポートを考慮する必要があると思われた。

【まとめ】高カロリー輸液ルートとしての外頸静脈カテーテル留置法は簡便で感染回避に優れた有用な留置方法と思われた。

